

教養を学習しよう - 病んだ社会の再生のために -

石田友雄

前筑波大学教授(歴史・人類学系)

前筑波大学副学長(改革担当)

現筑波大学名誉教授・パッハの森代表

病んでいる社会

今月(2003年7月)初め、日本中を震撼させる事件が立て続けに起きた。まず12歳の少年が4歳の幼児を性的衝動から誘拐・殺害した長崎の事件。次に少女を含む中学生4人が長時間にわたって仲間の少年をリンチ殺害し、死体を墓地に埋めた沖縄の事件。どちらの事件の加害者たちも、犯行後、平然と日常生活を送っていたことから、これらの非行少年たちには、そもそも罪悪感が欠如しているらしいと報道された。

同じ時期に、埼玉県知事が、彼の長女が政治資金規制法違反で逮捕されたため辞職したが、少年たちが引き起こした犯罪ほどには誰も驚かなかった。大多数の政治家が法網をくぐり抜けて私財を蓄えているのではないかと、誰しも疑っているからである。しかし、この知事が、最初、辞職しないと強気の発言をしたのには驚いた。彼にも罪悪感が欠落していたのである。

発覚後しばらくの間、これらの事件はマスコミのトップニュースになるが、たちまち風化して、世間から忘れ去られていく。しかも、同種の事件が次々に起こるから、ニュースヴァリ्यूスすらなくなってきた。少年犯罪は年々増え続け、特異に見える長崎の事件も、類似の犯罪が6年前に神戸で起きている。カネがからむ政治家の不祥事にいたっては、四六時中摘発されているから、いちいち覚えていられないほどである。

間違いなくわれわれの社会は病んでいる。しかも罪悪感という社会の土台が腐り始めているのだ。

実学の研究・教育機関

この状況に、日本の大学は(敢えて筑波大学とは言わない)どう対応しているのだろうか。何もしていない、と言ったら言いすぎなら、社会倫理の確立に、大学として貢献している大学があるだろうか、と質問

を変えてみる。建前や題目ではなく、通り一遍の学生指導でもなく、本当に「豊かな心の育成」を具体的なプログラムとして実践している大学があるのだろうか、という質問である。

例えば、最近、早稲田大学の学生が中心になって、大々的なレイプ・サークルを運営していたことが表沙汰になった。刑事事件になったため、さすがに早稲田大学は問題の学生を退学処分にし、学生問題担当者が記者会見の席上頭を下げたが、今後、より適切な学生指導をするという通り一遍の挨拶で一件落着。

しかし、これは他人事ではない。筑波大学に在職中に世間を騒がせた事件を思い起こす。筑波大学で医学を学んだ医師が愛人に入れあげ、妻子を殺害して死体を横浜の海に放り込んだ事件。筑波大学の大学院で化学を専攻した男がオウム真理教に帰依し、猛毒サリンを精製してサリンを撒く実行犯に提供した事件。

どちらの事件が起きたときも、大学の教育が間違っていて申し訳ありませんでした、と社会に向かって謝罪した者は誰もいなかったと記憶する。要するに、これは、事件を起こした個人の問題であって、大学の教育の結果起きた事件だとは、誰も考えていないからだ。

勿論、大学人には言い分がある。大学は

学問の研究・教育機関であって、道徳心の涵養を目的に活動している組織ではないと、多分、大学人全員が考えているだろう。だから、理論観の育成を大学に求めること自体、間違いだと言うことになる。

実際、建前はともかく、今の大学の実態は、学問、それも実学の研究・教育機関である。実学とは役に立つことを学ぶこと。役に立つとは、端的に言って、経済的利益があることである。国立大学の独立法人化もCOEプログラムの選定も、すべては実学の振興を目指している。

形骸化した教養科目

このようなわけで、今の大学の教員は全員、実学の専門家である。だから、彼らに「豊かな心の育成」の教育を期待することは専門違いだ、という意見がある。一見、正論である。

それにもかかわらず、土台から腐り始めた社会の諸問題を無視して、大学は、実学の研究と教育に専念していればいいというのか。実学を応用する場としての社会がなくなってしまうたら、元も子もないではないか。常識ある人々が誰も感じている疑問である。

戦後成立し継承されてきた大学のカリキュラムの大枠の中に、専門、すなわち、実学の教育とは別に、学生の人格の陶冶を

目的とする科目がなかったわけではない。教養科目である。

確かに、この科目に全く効果がなかったとは言わない。この科目の活性化のため努力した大学や教員個人がいたことを仄聞している。しかし、日本の大学全体を見渡したときに、教養科目が弱体化、形骸化の一途をたどってきたことも事実である。

思うに、それは、学生全員が、幅広く浅い知識の習得を目指すという、教養科目の目的の設定に原因があったのではないだろうか。そもそも片々たる知識の雑然とした集積を教養と呼ぶことが間違っている。本当の「教養」を身につけるためには、しばしば専門技術の習得以上に時間がかかるのである。

そのよい例が外国語だ。教養科目の中に必ず入っている科目に、英語を初めとする諸外国語がある。外国語を1週2時間2年間で習得することなど、出来るはずがない。私自身の経験では、外国の大学で講義を何とか聞き取れるようになるのに、留学してから毎日毎日その国の言葉を朝から晩まで学んで1年かかった。

世間一般の常識からするなら、英語こそ実学の最たるものである。それなのに、大学で「役に立つ」英語を教えていないことは周知の事実だ。教養科目から実学科目に移さない限り、大学の英語が「役に立つ」

ようにはならないだろう。

教養教育の提案

通常、学生は18歳から22歳までの4年間、大学に在学する。大学院まで含めればあと2年から5年、留年すれば20代全体にわたる。各人にとって、自分が一生何を目指すのか、その方向を決定しなければならない重要な歳月を大学で過ごしているのだ。

学生時代の最優先課題が実学の修得であることは当然である。だが、同時に、何のための実学修得か、という各自の人生にとって根元的な問題を自問自答する、最後のチャンスだということを、われわれは余りにも軽く見過ごしてきたようだ。戦後半世紀、経済的復興を目標に、この根元的な問題の自問自答が、人間として生きるためにいかに重要かということを教えないまま、大学は「役に立つ」人材を世に送り出してきたのではなからうか。その結果、日本は経済大国になり、経済的な豊かさは達成されたが、社会の土台は腐り始めたのである。

今、次世代の担い手である学生諸君が、実学を習得しながら、同時に「何のため」という自問自答を始めなければ、われわれの社会は再生する機会を永遠に失うのではないかと危惧している。そのためには、この問題を自問自答することができる「豊かな心」を育成することが緊急の課題なのだ。

それは、人命は何よりも貴い、というような題目を唱えさせることでも、既製の倫理や道徳を教え込む教育でも達成できることではない。(例えば、古典的宗教書、哲学書、文学の類から、音楽、美術などの芸術作品のような)偉大な文化遺産の学習や、(例えば、知恵遅れの子供たちのケアにヴォランティアとして参加するような)社会の片隅にいる人々と接触する体験を通して、各自が自分なりに人間存在について思考することから始まるのだ。このような、理性と感性と体験の総合的な学習の指針を与えることを、私は「教養教育」と呼ぶ。

教養教育が実学教育と根本的に違う点は、「役に立たない」ということである。従って、出席時間数、試験、ペーパーなどの義務で縛った卒業要件としての単位獲得のシステムは、教養教育には相応しくない。それは、単位にもならなければ、卒業要件にもならないが、そのテーマに各人が抱く好奇心や感動といった内的な衝動から、各自が自発的に参加する学習サークルでなければならない。

このような学習サークルの一例として、筑波大学の西5キロの地点で、18年前から、オルガニストの家内と共同で開いてきた教養教育の私塾、バッハの森を紹介したい。現在、30数名の一般市民が、毎週1回以上、合唱、レッスン、研究会などに参加して活

発に活動している。10代から70代まで各世代、7、8人で男女比は1対2、筑波大学2年生の男子学生も1人いる。なお普段は集まらない会員が約200名全国にいる。

断るまでもなく、バッハの森に何年いても何の資格も得ることができないから、およそ「役に立たない」のだが、数時間かけて遠方から毎週集まるメンバーが何人もいる。最近、30代後半から40代のメンバーが数人で、バッハの森が目指す「教養」を理解するのに10年かかったと述懐するのを聞いた。

このように、バッハの森は進化しながら活動しているが、その「科目」は限定されている。バッハの森の活動に参加した筑波大学の学生は、18年間に、多分、20人もいないだろう。だから、今後、大学キャンパスの内外に、多種多様のテーマを掲げた教養教育のサークルが多数出現して、学生諸君に「教養」を学習する場を提供することを期待している。

いしだ ともお